

茨城県笠間市は、笠間盆地を中心に山や丘陵が連なり、国の天然記念物ヒメハルゼミなどの動植物が生息する自然豊かな地域だ。しかし近年は、都市化や農家の高齢化と後継者不足で野原や畑地、森が減り、田園、山林が原野化して、環境が荒れてしまった。

NPO法人「ビオトープ天神の里を作る会」（笠間市）は、荒廃した農地や山林をビオトープとして整備し、自然環境の再生に取り組んでいるグループだ。2003年4月、合併前の友部町で環境基本条例が施行され、市民参加によるビオトープづくり事業が「環境基本計画」に盛り込まれたのが、活動開始のきっかけだった。

「一見すると緑豊かな田園都市ですが、いつの間にかメダカなどが見られない環境になっていました。友部町の計画に基づいてビオトープづくりを始め、06年の合併後、07年度に『笠間市環境基本計画』が策定され、その時点から30年前の生態系と自然を復元する指針で改めてビオトープづくりをおこなうことになりました。翌年、市と『かさま環境を考える会』、新たに募集した市民による月1回の活動がスタート。09年度から、新規参加者を含めた『ビオトープ天神の里を作る会』

え、「オオムラサキの里」と名づけた。

自然が再生されると周辺地権者に活動を理解してもらえようになり、シユンランの里、カタクリの里、トンボの里、ハナハスの里など次々と増し、現在、整備地は2万7000㎡に広がり、約350種の生き物が見られるようになった。

「2年間草刈りを続けると、在来生物が再び姿を見せてくれます。昨年はギンラン、今年はキンランが群生で観察でき、成果に驚きました。私は登山が好きで、記憶に残る美しい光景をイメージしながら、ビオトープのテーマを設けてきました。オオムラサキの里なら、幼虫の餌になるエノキの苗木を植え、ハイケボタルを目標にするならタニシが住めるように水道の流れを調節します。ため池の大きさによって動植物が変化します。住みやすい環境でないと、生物はすぐにいなくなってしまう」（橋本さん）

活動開始から10年以上が経ち、メンバーの平均年齢が60代になった。13年1月にNPO法人化し、機械を導入して広大なビオトープを守っている。ビオトープづくりのほか、つり大会や自然観察会を通じた環境教育も手がける。この活動は、セブン・イレブン記念財団の助成を得ておこなわれている。

ただいま活動中

NPO法人 ビオトープ天神の里を作る会

都市化で失われた生きものの楽園を復元



5kmを2時間かけて歩き、天神の里の秋を満喫する里山ウォーク



6月の夜のゲンジボタル観察会。野外に出かける前に基礎知識を学ぶ



休耕田につくられた「トンボの里」。池には木道が渡してある

谷津田のあとに、山砂を敷いた遊歩道を整備して完成した「ヤマツツジの里」

を発足させました」と、会の副理事長を務める橋本正男さんは振り返る。

「ビオトープとは「生物住息空間」を意味し、「多様な生き物が持続して暮らせる生息空間をつくる」目的で、グループは活動している。最初のビオトープづくりの場所になったのは、笠間県立自然公園に近い1100㎡の土地だ。谷あいにあつた谷津田が30年前から放置され、ハシノキやガマが生い茂る湿地になっていた。江戸時代に建立された天神様の祠や灌漑用の天神池があり、一帯は「天神」と呼ばれていた。そこで名称を「ビオトープ天神の里」とし、整備地を広げるたび「〇〇の里」と命名することにした。

「最初の整備地は、メダカやホタルなど水生動植物のビオトープにしよう」と決め、『メダカカンボの里』と命名しました。ハンノキやヨシを伐採して池を2つ作り、木道を設置すると、翌年の春にはメダカが群れて泳ぐようになり、秋にはカワセミやサギが訪れるようになりました」（橋本さん）



天神池でフナやクチボソつりに挑戦するつり大会。ザリガニも大人気



「オオムラサキの里」では09年にオオムラサキの幼虫を初確認。その後、幼虫を鳥から守るためネット張りのケージを設置した



06年度以降、300種以上の動植物が確認されている。とくに多いのがチョウとトンボだ



沼地の泥上げ。一度荒れた里山を復元するには地道な作業が必要だ

針葉樹を伐採して落葉樹の森にした「カタクリの里」では、9月になるとツルリンドウやヤマジノホトトギスなどが咲き、トンボが飛び回る。人の暮らしを支える豊かな自然を、橋本さんたちは取り戻し、次の世代に伝えていく。